現代詩／詩論研究会　第五回（２０１３年９月８日　於パレス神戸）

『荒地詩集』における黒田三郎エッセイの位置」

鹿児島県立短期大学　竹本寛秋

■目次

1　年譜
2　テキストについて
3　各評論についてのまとめ
4　タイトルの問題
5　「民衆」「俗」の問題
6　「共同性」の範囲をめぐって
7　「代表」と「代行」の問題
8　黒田における「自由」の問題
9　黒田における「あとがき」の意味
10　「生活感情」の問題

■簡単な年譜

一九一九年　二月二十六日、広島県呉市に生まれる。
一九二二年　鹿児島市に転居。
一九三六年　第七高等学校造士館乙類入学。「VOU」に参加。ポー、ボードレール、ヴァレリーなどの作品に接する一方、マルクス、エンゲルス、レーニンなどの著作に没頭。
一九三九年　東京帝国大学経済学部の受験に失敗。この頃、鮎川信夫、三好豊一郎、森川義信らと知り合う。
一九四〇年　東京帝国大学経済学部商学科入学。「VOU」「新技術」「新詩論」などに詩・評論を発表
一九四二年　徴兵検査にて第三乙種合格。戦争のため半年繰り上げで大学卒業。南洋興発株式会社入社。
一九四五年　東ジャワの製糖所に勤務していたところ、現地で召集される
一九四六年　帰国。日本放送協会に放送記者として入局。
一九四七年　九月、雑誌「荒地」創刊、十一月号より翌年一月号まで黒田が編集にあたる。「純粋詩」「荒地」「詩学」などに詩を発表。
一九四八年　日本放送協会勤務とともに、日本歯科大学予科講師としてドイツ語を教える。七月「荒地」終刊。十二月、結核の診断を受け、翌年鹿児島市にて療養。
一九五一年　放送文化研究所勤務となる。長女ユリ生まれる。八月『荒地詩集』一九五一年版刊行。

■テキストについて

「権力と詩人」

『荒地詩集 1951』ではタイトルが「詩人と権力」

初出は「CENDRE」6号　一九四八、「VOU」33号　一九四九（『黒田三郎著作集　第二巻』より）

「詩の難解さについて」
「民衆と詩人」
『荒地詩集 1952』では「詩人と運命」という総題の下に「1　詩の難解さについて」「2　民衆と詩人」という構成になっている。
「詩の難解さについて」
初出は、『詩学』（一九四九・四）（「年譜」『現代詩手帖』一九八〇・四による。鮎川信夫「現代詩とは何か」注にも言及あり。）
「民衆と詩人」
初出は『純粋詩』（一九四八）（鮎川信夫「詩人と民衆」の指摘によれば。『現代詩手帖』一九八〇・四の「年譜」では『詩学』（一九五〇　十・十一月号）としている

▼転載と、転載ごとに書き換えられる運動性の中に、「荒地」という共同性の磁場を見る観点は北川論に既に言及されている。

はじめは単純に、執筆時期を確定したいという気持ちで年表に当ったに過ぎないが、しかし、それが「純粋詩」から「詩学」へ、更に『荒地詩集』、単行本へと転載を重ねている過程を知るにつれ、わたしの関心は別のところへ移っていった。それは、初出から転載を重ねていく場所が、別の表現との共同の磁場を形成していく過程でもあるということである。それにわたしの読みうる『荒地詩集』版から、『内部と外部の世界』版への移動に際しては、改稿の跡があるから、それはその前の移動の過程にもあるのかも知れない。しかも、年表をたどってみればわかるように、この転載と改稿という表現の持つ運動性は、黒田三郎の一エッセイの問題にとどまらない。それは実は、「荒地」の初期同人たちの作品やエッセイの成立過程が、共通に持っている性格である。むろん、現象としてのそれは、あまり人目につかない雑誌から、比較的多くの人の眼に触れる場所へ出現していく過程に過ぎないだろう。敗戦直後の詩ジャーナリズムの未成熟ということも関係しているかも知れない。しかし、それらの現象を通して、鮮明に浮き上がってくるのは、いわば「荒地」の詩人たちが、それぞれの多様な個性を、それとして生成する過程が、同時に、〈荒地〉という私的な共同性、その共感の磁場の形成と緊密に重なりあっているという問題である。」
（北川透『荒地論―戦後詩の生成と変容』（思潮社　一九八三・七））

■黒田評論の変遷と黒田の詩的立場の変遷の関係について
▼宮崎真素美は『失われた墓碑銘』の未収録詩、および初期エッセイの理論の変化について検討し、そこにモダニズムからの移行、「VOU」に対する黒田の疑問の源泉を見ていく。

三つのエッセイに通じて流れる問題は詩におけるリアリティについてであり、当然のことながらそれは常に詩人と詩の、あるいは言葉の関係として表れてくるのである。詩におけるリアリティに対する意識が、黒田の中で深められ変化するに伴い、言葉が単なる記号としてでなく言葉としての意味を与えられてゆくのである。リアリティの意味合いは、映像的な現実の模写から、現実として感じ取られる、精神の介在した共有できる現実へと変化したと言えるのではないだろうか。

この三つのエッセイにおける彼の意識の推移は『失われた墓碑銘』に関する収録詩篇と未収録詩篇の詩法の違い、またその決定と無関係ではないだろう
（宮崎真素美「黒田三郎」（『鮎川信夫研究　―精神の架橋―』日本図書センター　二〇〇二・七））

■『荒地詩集 1951』『荒地詩集 1952』における黒田三郎エッセイの位置
→『荒地詩集 1951』『荒地詩集 1952』目次
▼鮎川「現代詩とは何か」の次に位置するものとして。「荒地」の磁場の中での黒田の詩論
▼かつて発表されたエッセイが、『荒地詩集』という場の中に再配置されることで意味を持つこと
　1「権力と詩人」：共産党 硬直化した理論の支配に対する批判
　2「詩の難解さについて」：言葉から意味を剥奪することに対する批判　モダニズム批判
　3「民衆と詩人」：言葉の依って立つ共同性、内面、固有名の問題
→単行本においては、それぞれの論は並置され、個別の評論として読まれることになる。
もちろん、それぞれの論は『荒地詩集』以前に別々の場所で発表されているわけであり、『荒地詩集』に、（タイトル、章立ての変更をなされつつ）並べられることによって「荒地」の中で機能するように配置されているといえる。

小海永二「戦後日本の詩運動」（『近代詩から現代詩へ』有精堂　一九六六・四）
「すでに先に述べたように、「荒地」の運動が反響を呼び出したのは、一九五一年の『荒地詩集・第一集』発刊以後のことである。旧『新領土』系のモダニズムの詩人と、それと対極的立場に立つ左翼の詩人との、両翼からする「荒地」批判の声にはさまれながら、彼らの訴えは当時の社会的状況を背景に共感の層を増し、戦後詩の主流的な位置を占めるに至った。だが、その活動のヴォルテージは、この一九五一年、五二年をピークとして、これより下ることはあってもいっそう高まることはない」

木原孝一「その主張」（“荒地”グループの総決算」『現代詩手帖』一九五九・八）
「この「Xへの献辞」を詳細に読めばわかるように、ここには後天的な技巧と知性、即ち人工的な詩であるモダニズムと、政治的手段として詩を認識するプロレタリア詩への否定がある。そうして「荒地」の主張するところは、「詩は人生にひとしい」ということにほかならない。その意味では、新しき「人生派」だつたと云つてもよかろう。しかし大正期のいわゆる「人生派」とはモメントをまつたく異にする「人生派」だつた」

■各評論についてのまとめ
○「権力と詩人」
1
・共産党におけるイントレランスの問題
＊原理原則が徹底されること対する危惧と疑惑
▼「共産党」の「理想主義」と「軍国主義」の「滅私奉公」は方向性が逆なだけで、同質なのではないかという洞察

けだし、鉄の規律は報いられることを期待せず、ひたすら献身だけを心がける人間に必然的に伴うものであろう。軍国主義者が上から滅私奉公を強いたのにくらべるならば、これは同じことを下から行おうというのであって、この言葉の美しさには、人生を愛する中学生の純情さに似たものがある。

しかし、ひとりの俗な市民として僕が考えたいと思うことも、ここに理由がある。僕らの通俗な日常生活を支配しているのは、一応ギブ・アンド・テイクの常識であって、決してギブだけでもなく、テイクだけでもない。僕らの生活が営まれているのは、ギブとテイクのバランスにおいてである。こういう世界では、僕らはよそ行顔をしたり、窮屈な思いをしたりせずにすむ。ひとりの俗な市民として、一方的な献身だけを看板にしている人間を眺めるとき、それをさかさにすれば、一方的な搾取だけの世界となるのではないかという惧れと不安を感じざるを厚得ないのである。献身という姿勢をとるためには、努力がいる。いつもうまく姿勢を正しているためには相当の苦痛を覚悟せざるを得ないだろう。もっと自然にふるまい、楽な気持でいたいという欲求がある。ギブ・アンド・テイクの世界に生きているひとりの人間としては、ギブだけを標傍して自分自身に不安を懐かないような人間に対して、何となく不安な気持が湧いてくる。(pp.268-269.)

▼「俗な市民」という問題系

「いつもうまく姿勢を正しているためには相当の苦痛を覚悟」せざるを得ず、もっと「だらしない」存在として人間を把握する

2

＊清水、宮城、丸山、松村の座談会からみえる、マルキストのイントレランス、硬直性の指摘

＊未知のものを認めない態度としてのマルキスト。そのため、個別には正論を述べているにもかかわらず議論は平行線をたどり、そこに対話は存在しない。

3

＊一方で、「敗戦」によって変わり果てた現実の中で「変わらないもの」として存在し、引き裂かれた青年に解答を与えるものとして強力な魅力を持って存在したマルクス主義。しかしそれはあくまでも外部からの理論にとどまり、個別の内面の空白には解答を与えることはない。

灰嬢のなかからまず発せられるものは、無数の疑問である。自分自身に対する、社会に対する、世界に対する、無数の疑問である。

無数の疑問に対して、まず見事な解答を与えたものは、マルクス主義者である。「何故われわれの社会は戦争をはじめ、しかも、戦争は惨澹たる敗北に終らねばならなかったか。」

マルクス主義者の見事な解答にもかかわらず、しかも、僕がなおはなはだ不満であるというのは、どこに原因があるのか。

「何故われわれの社会は戦争をはじめ、しかも、戦争は惨塘たる敗北に終らねばならなかったか」という疑問に対して、マルクス主義者は見事な解答を与えている。だが、「何のために自分はこの

五年をあのように過したのか」というわれわれひとりひとりの胸にある空白を埋めるためには、それは無意味である。(pp.274-275.)

4

＊河上肇の『自叙伝』が、結果から書かれたものではなく、「過失を犯す人間」として描かれていることを評価し、徳田球一『獄中十八年』に対置する。『獄中十八年』が感銘を与えるのは自分自身がそうではありえないという「弱み」に源泉を持っており、そこにおいて「誤謬無き人間」、規範的人間による強制、外側からの個人の内面への理念への服従という圧力が発生する。そうした構造に対する違和感がコミュニズムに対する疑惑にもつながっていく。

5

＊転向者であっても、理論の上でマルクス主義を批判することは可能であるにもかかわらず、それを行った者がいないということ。そこから、日本における「理論」というものの位置を措定する。ヨーロッパの土壌で歴史的に埋め込まれたものとして生まれてきたマルクス主義が、固有の文脈を離れて「理論」としてのみ日本に移植された際に生じる「避けがたい間隙」を指摘する。同時に、日本において「理論」ではなく根底にある「生活習慣」が自己の判断を左右しており、さらに、そうした「生活習慣」に縛られた存在としての自己について、その主張者自身が無自覚であることを指摘する。

西欧思想が輸入される場合、多かれ少なかれそうであったように、内容と形式は分離し、当の本人はその名前によって退けているものを、実は自分の体にふくみながらも、名前を名乗ることによって自分はそれを免れているように思い込む、そういった傾向がそこにも顕著に見えはしないか。日本的な生活慣習、前近代的な人間関係、権威主義的な考え方、感じ方を、その奉ずる〈理論〉によって退けながら、実は自分自身がそういうものによって動き、しかも自分の奉じている〈理論〉のために、かえってそういう自分を反省できず、あたかも自分だけは免れているように思い込むというからくりがそこにある。(p.280)

＊「理論」の支配ではなく「理論に対する信服」を問題化し、そこにおける「生活習慣」の問題を提起する。「日本的な生活習慣」は思想・理論の一貫性に対するものとしての潜勢力として避けがたく存在する。

そこにあるひとつの問題に注目したい。我が国において、いわゆる〈理論〉というものはどういうところにその特長をもっていたであろうか。理論そのものを考える前に、理論に対する信服を可能にしたものは、果して何であったか。理論は、われわれの生活慣習にとって、歴史的にどういうものであったか。理論を裏切るものはどこにあったのか。

6

＊集団と権力の問題。権威は自己の外部に存在するものであり、集団において個人の責任を免れた状態で権力機構に属し、権力に支配される。進歩的思想と言われているものが、実は前近代的な心性に

支えられており、その状況において個人が自らの意志を失って「自動人形」と化すからくりの指摘。

集団において、ひとびとは催眠術にかけられた被術者のように、個人的な責任観念からぬけ出して感情的に、感染しやすい存在となりやすい。権威は自分の内部にあるのではない。権威は自分の外部にあるのである。

こういう集団精神のひとつの型を、われわれは戦争へ駆り立てられた日本の国民の心理に見ることができる。そこでは、前近代的な残浮を十分に含んでいる民衆が、専制権力に盲従するというその前近代的な特質を十二分に発揮して、最も近代的な権力機構に仕えるという事態が生じている。

反対に、このような心理傾向をもった民衆が共産党に投じた場合どうであろうか。最も進歩的な思想を奉じる政党において、かえって最も露骨に民衆の前近代的な特質が露出するという傾向を、そこに見ることはできないだろうか。

組織が強く支配するところでは、その一員である個人は、自分の意志をもって自分を導く力のなくなった一個の自動人形となりやすいのである。その際、個人を全体につなぐものが民衆の心の底深くひそんでいる無意識的な性質にかかっているとしたら、どうであろうか。しかも、その掲げるものが、最も進歩的なものであるとしたら。(p.283)

7

＊この文章が書かれなければならない理由。『荒地詩集1951』では章題は「後書」であるため、『荒地詩集』では「6」までで完結した論理という体裁である。現代において指向する上で共産党の問題は避けて通ることの出来ない問題であることが語られる。

→黒田における「あとがき」の問題

＊詩が何物からも独立して存在できるものではないこと。しかし同時に詩を誇大に考えることもできないこと。さらに交換不能の存在としての詩。しかしなおかつ言葉を通してあらゆるものとの関係の中での可能性の上に成り立つものとしての詩。

詩人が詩について語る前に、共産党について語るなどということは、おそらく坊主が魚肉の好悪を語るようなものであると考えられるかもしれぬ。詩人の問題とするものが共産党であって、プロレタリア詩ではないということが、奇異に思われるならば、一言これに答えておかねばならぬ。

しかし、詩人が詩人という名によって免れる現象は、何ひとつないということを、ここにくりかえして語る必要がある。

(略)

もちろん、われわれは詩を誇大に考えてはならないし、詩に過重な要求をすることには、常に深い反省をもたなければならない。詩は万能ではない。万能ではないどころか、主食の代用にもならなければ、道徳の代用にもならない。何の代用にもならないのである。しかし、あらゆるものの代用品でないということは、もちろん、詩についても代用品がないということである。

詩が道徳の代用品でもなければ、宗教の代用品でもないということは、しかし、詩に道徳的なものや宗教的なものが含まれていないということを意味しはしない。また、詩に道徳的なものや宗教的なものが含まれてはいけないということを意味しない。純粋という観念でラッキョウの皮をむくお猿のような芸当を演じなければならぬ必要は墓もない。

詩は言葉のうえに成立する芸術であり、言葉が思惟の形式として人間的なものである以上、そこにはあらゆるものが入ってくる可能性があり、詩の創造力は、このような可能性のうえに打ち立てられるのである。(pp.285-286.)

＊既存の「詩」という概念に頼ってなんとなく「詩」を存立させることはできないということ。「生活を通じた個人の体験」における「詩」の立脚点をさぐること。その上で、現代において避けがたい世界認識としての「マルクス主義」「共産党」の分析の必要性。それ故にその分析は個別のプロレタリア詩のレベルで行われていないということ。同時に「言葉の寄木細工」ではないものとしての「詩」を措定することで、モダニズム批判も行っている。

▼「詩」という領域、「詩人」という存在の自明性に対する疑問

▼「詩」という領域を外部に存在する確立した領域としてみなさない立場は「荒地詩集をどう読むか」でも表明される

鮎川　（略）黒田の詩をみて、いつもゾツとするのは、詩というものをなにか信用していないところがあるように思えることだ。例えば、自分の人生とか、人間の社会生活から切離した、詩だけの独立した美というものを、全く拒絶していることを感じるのだ。それについて僕は自分のエツセイの中にもずいぶん書いたけれど。

黒田　結局それは、自分がつくつたものが詩かどうか疑問をもつてるわけだ。それが詩になつてるかどうかは一種の結果なんだ、僕にとつては。その中に美があるかどうかということもやはり結果なんだ。

鮎川　だから黒田の詩の美というものは、朔太郎や白秋や中也とは違つて、詩を書いている特権によつて得られる美というものぢやないのだ。

黒田　ぼくとしては、出来た詩に美がなかつたら捨ててくれ、という態度なんだ。そして美があつたら偶然なんだよ。

（「荒地詩集」をいかに読むか」中桐雅夫、鮎川信夫、黒田三郎、田村隆一（『荒地詩集 1952』））

▼全体を通し、共産党批判というより、戦後における思想の布置の構築を読み解き、明示的に示されている「理論」の下にある「生活感情」の存在を指摘し、「共産党」の生硬さが、実は旧来の生活感情に基づいた進歩性を装って、集団の力として外部から人間へ干渉することを指摘することに眼目があると読むこともできる。その上で、「詩」が世界と切り離されたものではありえず、現在の世界に組み込まれたものと自覚した上で「詩」の位置を確定しようとする。

○「詩の難解さについて」

＊日本における「詩の難解さ」がヨーロッパの文学運動を、それが持つ背景を無視して「生半可」に

理解して利用しているところに見出す。ダダやシュルレアリスムは、西洋においては必然として発生したが、日本においてはその発生の必要性を持つことなく利用し、「失語症の真似をして、それが新しい詩人の特権」と考えることで「イミテーションが新しさにおいて横行する」事態を招くこと。

ヨーロッパにおいて、シュルレアリズムの行動力を生み出したものは、新しい世代を圧しつける古い石の町の伝統ではなかったろうか。石の町ではなく、木と紙の町に住んで、ひしひしと頭上にのしかかる重圧を感じないところでは、彼等の示したポーズだけがたやすく受けとられるのである。そこで、シュルレアリズムによる詩の革命という安易な考えは、どういう結果を招いてしまったか。それ以来、詩人たちは、言葉のもっている社会的な意味や役割、そしてその習性について、自分で自分の目をめくらにしてしまったとしか考えられぬ場合が少なくない。(p.192)

▽「シュルレアリズムに伴う詩の革命という考えは、詩人達に対して、屡々公共機関としての言語及び其の習性について、たやすく盲目になる機会を与えた、としか考えられぬことが少なくない」『荒地詩集 1952』

→『荒地詩集』ではシュルレアリズムに言及する際に「言語」を「公共機関」と表現している

＊黒田の発想は、〈移植〉という手続きにおいて、その元々のものが根ざしていた背景が欠落することに対する無自覚をつくという形をとる。

詩という概念が成立するのは、詩と詩でないものとの境界においてである。詩と詩でないものとの間に生きている人間にとって、彼を詩に駆り立てるものは、むしろ詩でないものである。ヨーロッパの詩だけを学び、それに比較して日本の詩を考える詩人たちにとっては、詩でないものは単にヨーロッパの詩に似ていないものである。このことは、いったい、われわれに何を意味しているだろうか。

チューリップの移植は、果してうまくいくであろうか。われわれが洋服を着こなすにしても、足が長く体に柔軟性のあるヨーロッパ人の場合と、足が短く体に柔軟性の少ない日本人の場合とでは、同じようなポーズをねらうわけにいかない。しかし、ねらわれるのは、しばしば眼に見える同じようなポーズだけである。その限りにおいて、そこには常に絶対的な劣等という結果が出てくる。(p.295)

＊言葉から意味を放逐することに対する批判。いわゆるモダニズム批判。意味を放逐することで露呈する「日本的貧困」。こちらについても、言葉を、言葉を支えるもの（社会的な産物としての言葉）から安易に独立させることを批判し、それが本当に必然的要請に従ったものであるかが批判の対象となる。一方で、「言語」＝「社会的産物」から立論するところに黒田の発想における詩＝民衆への経路があるともいえるかもしれない。

現代詩を難解にしている具体的な例を見ると、それは意味の放逐である。意味の放逐をきわめて妥当なものであるとする場合にも、もしも、意味の放逐によって得られた結果が、単に意味を放逐したというだけのことであったら、それに気がついたときに、考え直すべきである。意味の放

逐によって現代詩人は何を得たか。言語から意味を放逐するならば、詩において、意味の放逐によって失ったものを償って余りがなければならぬ。あらゆるものが犠牲なしではすまないとしたら、意味の放逐も止むを得ない。しかし、放逐が単に放逐にすぎないとすれば、それは明瞭に無意味である。言語は社会的な産物であり、ひとつの客観的な存在である。詩の用具として、詩人がこれに勝手に手を入れる場合、そこに、どれだけの覚悟が必要であるか。(p.297)

＊詩人が言葉に存在を賭けるために、言語を道具として利用するオプティミズムを払底すること。言語を道具として利用する態度において、詩は難解になり、無力となる。

言葉に対するオプティミズム。いわば、言葉を単に詩の道具と決めてしまうときの、「読むことも書くこともできる人間」であるわれわれの、「読むことも書くこともできない人間」であるわれわれに対する安易な態度、そのふたつの間にある深淵。それはわれわれが模倣する芸術としてヨーロッパの芸術をもち、しかも第二次大戦後の日本に生きているという現実と相侯って、われわれの詩を難解なものとし同時に無力なものとしている。(p.300)

▼〈移植〉という手続きによって背景を無視した意味の放逐、言語を道具として考えることへの批判。言語を道具として利用する楽観的な態度では、詩に自己の存在を賭けることはできないということ。

○「民衆と詩人」

＊「詩が民衆のものである」ということについて

＊ここで黒田は「詩は民衆のものである」ということが何を意味しているかを検討する。

＊ここでの黒田の論理はそれほど単純ではない。「民衆のものである」という言辞が意味するものは何か。

・「民衆」の「所有」するもの

・「詩」を生み出すものが「民衆」であること

・「詩」の「生産者」である「詩人」も「民衆」に内包されていること

・そもそも「民衆」とは何か。

「民衆」の「生活感情」を代表するならば、流行歌の作者こそが最も詩人である

・とすれば「詩人」における「代表」とは何を意味するのか。

＊このように黒田は論理を進め、その上で、「群集心理」とは別の「一見非公共的としか考えられない「個々の心の秘密」に通底すること、表面に現れない「私事」によって「詩人」と「民衆」が結びつく回路を見出す。

詩が民衆のものであるという言葉は、ずいぶん言い古されているが、またいつも新しい意味をもっている。詩が特定のひとびとだけに属するものとなったときには、いつも新しく言い直されなければならないからである。詩が民衆のものであるというのは、詩人によって創造された詩は、文化財のひとつとして民衆の所有に帰するということであろう。特定のひとびとに属するもので

はなく、作者そのものにさえ属さないということであろう。詩は民衆によって生き、民衆とともに生き長らえる。しかし、必ずしもそれだけではない。産み出されたものの所有について言われているだけでなく、詩を産み出す過程についても、詩を産むのは民衆であると言われている。

いま、ポール・ヴァレリーがその詩学で使用したように、便宜上、生産と消費という経済学上のふたつの概念を使って、詩の両面を考えてみるならば、詩と民衆との関係は、いくらか明らかになるかもしれぬ。たとえ詩の生産者を詩人という特定の人間に帰するとしても、その詩人がまたまぎれもなく民衆のひとりであるという点で、詩が民衆につながる意味があるからである。しかし、詩人が民衆のひとりであるといっても、果してそれがどういうことなのか、そこにもいろいろな疑問がある。考えようによっては、流行歌の作者こそ最も生き生きとした民衆の生活感情の上に立った詩人であるということになりかねない。民衆とはそもそも何のことかというところにまで、問題は及んでいく。おまけに、世の中には、自分で自分を民衆詩人と称する詩人もあって、なかなか面倒である。(p.301)

＊「代表」の問題。黒田は「代議士」との違いにおいて、「詩人」の「代表」の問題を考えることを試みる。その上で、「詩人」の代表を、表面に現れる群衆心理ではなく、個人の裡に秘められたものを言い当て、極めて「私的」なものであることによって、逆に「民衆」がその心に通底するものを見出すような仕組みで「詩人」の「代表」が機能することを指摘する。

もし仮りに、詩人が民衆のひとりであるということが、民衆の或る一面を代表するというような意味であるならば、どんな面で詩人は民衆を代表するのか。(略)それは詩の公共性が一見非公共的としか考えられない各々の心の秘密に依存しているのと同様である。(p.301)

＊詩における「固有名」と内面の問題。詩が民衆に属するのであるとするならば、本来詩は無署名であることが純粋さの証になるはずである。しかし、たいていの場合、人は自分の固有名において語ることは行わないことを考えるならば、詩人は固有名で「私見」を語ることによって「万人に共通なもの」に触れるということができるとの指摘。

お国のため、お家のため、と言えば、いまさらおかしいだろう。しかし、党のため、団体のため、みんなのため、いろいろのためがあって、ひとびとは、それが何よりもまず自分のためである時にさえ、自分のためと名乗り出はしない。何か他のためをもち出すのである。そこでは、自分のためというのは、恥ずべきことなのである。(略)主体を示す真の一人称は言論から消え去っているのである。このような時代に、詩人がいまもなお彼個人の名で詩を書き、しかも、そこに何かの意味があるとすれば、それはどういうことであろうか。それを仮に詩人が私見を述べるからということにしよう。もしも、単に私見であって、しかもなお万人に価値があるとすれば、いわば、それが私見である点において、正に万人に共通なものがあるからであろう。(p.304)

▼このことは、黒田において繰り返される「大臣は大臣の言うようなことを言い」「僕は／僕の言うようなことを言い」の主題と通底した、役割を課された人間の発言とかかわる問題といえる。

＊「権力の象徴」である「与論」＝「万人の服すべき虚構」に対して、同時に詩人は固有名によって語ることによって、自己の名の責任のもとに「自分そのものを賭ける」。ただしそれは民衆に内包されたものとしての「詩人」という位置づけにおいてなされる。

このような社会において、詩人は、彼固有の名の下に、責任を明らかにしなければならぬのである。詩は経験である。名によって、作者は、彼自身の生き方をあえて問うているのである。（略）作者たるものは、その名によって、かけがえのない自分そのものを賭けているわけである。これは民衆のひとりである詩人の良心の問題である。(p.305)

▼「日本の詩に対するひとつの疑問」（『荒地 1954』に所収、後『内部と外部の世界』）の中原中也論との関係

大部分の詩は、その焦点に作者としての人間中原中也がいて、彼を知っている者にはうまく焦点が合い、ひとつひとつの詩に深い意味を読むことができる。しかし、逆は必ずしも真ではないのだ。中原中也を知らない人間が、単に一冊の詩集として『中原中也詩集』を読むとき、非常にすぐれた少数の詩を除いては、風変わりな作者のその場その場の思いつきに終っているように感じられる詩が、決して少なくないのである。（略）作者というひとりの特定の個人を介することなくしては、何か不完全な所があるからではないか。(pp.309-310)

→もちろん、黒田は中原中也を単に貶めているのではなく、中原中也を起点として日本における私小説、抒情詩の問題を、（やはり）日本社会との関係において考察していく。

■タイトルの問題

○「権力と詩人」は、『荒地詩集 1951』では「詩人と権力」

▼「権力と詩人」と「詩人と権力」の転倒によって何が起こるか。

▼「と」は並列なので、前後は同じ重みであると一応は言えるが、転倒されることが持つ意味。

黒田の「民衆と詩人」批判といえる鮎川信夫の文章は「詩人と民衆」である。

■「民衆」「俗」の問題

「黒田三郎の世界につき立てられていた二つの極は民衆と個人であった。その間にいつもゆらぎながら市民というものが存在していた。未だに日本語として定着し得ていない、この「市民」という言葉にこだわり続けたことが黒田三郎の生涯であったといっても言いすぎではないと思う」

（上手宰「民衆と個人の遠近法」（『詩学』三五巻四号　一九八〇・三））

○「民衆」という言葉の大きな違和感

→現在でも、「大学の研究と一般市民をつなぐ」というような物言いをする際に「市民」「国民」「人々」のどれも、範囲を確定する語として違和感のある現状がある。：「民衆」という言葉遣いそれ自体が「「民衆」という言葉を発する者」と「「民衆」の中に包摂された者」のズレを顕在化させてしまい、

「代表する者」／「代表される者」の間にある上下関係を不可避的に露呈してしまうこと

→ただし、同時に、黒田は、詩作においては代表者というものの存在が空虚であることに自覚的でもある。

→では、どういう代替の語がありうるか。あるいは、こういう発想の方向自体が間違っているのか。

▼鮎川信夫は「詩人と民衆」（『季節』一九五六・十）において「彼の社会的主題にとって、民衆はつねに政治的権力の被害者としてあらわれ、それ以上のものではないのである」といい、また、「本質的には、民衆論者でありながら、どう間違っても民衆のエネルギーなどと言い出さないのである」として、黒田の視点の有効性の狭さを指摘し、黒田を「本質的に受身の詩人」であり、受け身であることが極めて徹底された詩人として黒田を位置づける。鮎川は「民衆を自己流に解釈することを警戒しながらも、いつのまにか牢固とした民衆観ができあがっている」と黒田の思考を、「あまりにも小市民的なもの」ものと断じ、「詩人は、詩を書くことによって、いやおうなくエリートの位置に立つのである」「意識しようとしまいと、彼はエリートとしての責任をのがれることはできない」と述べる。

→鮎川の論題が「詩人と民衆」と、黒田の「民衆と詩人」を転倒しているのは、「詩人」の立場から「民衆」の位置を考えるという意識の現れとして読める。

▼北川透も、「黒田はどうしようもなく、《詩は民衆のものである》という前提から出発してしまった」といいつつ、黒田は「民衆」をドグマとしてふりまわしているわけではないが、この設定をしたが故に「詩（人）と民衆の関係を彼なりにつきつめていかざるをえない」位置に立たされたと論じる。（北川透「〈荒地〉の文明批評的性格をめぐって」『荒地論　―戦後詩の生成と変容―』（思潮社　一九八三・七））

○「俗な市民」の問題

▼大岡信は鮎川の「現代詩とは何か」を「本質的にはロマンティストの言葉」であると位置づけ、黒田の「詩人と権力」を「より現実的でより常識的な、しかし、同時に一層危機的な批評意識に貫かれた現代詩人の「位置」に関する考察」と位置づける。

その上で、鮎川の思想の衝迫力は「戦後の緊迫した幻滅感」を失ったとき効力を失い、黒田の言う「俗な市民」の生活が表れると述べる。それは単純な「市民」ではなく失望を経由し世界に対して批評性をもった「俗」である。

> 戦後の緊迫した幻滅感――幻滅もまた緊迫した精神の所産である――を養分にしている間は、この思想は、みずからの矛盾をむしろ原動力として働らくことができた。だが、幻滅もやがて終る時が来るというのは、恐るべき人生の真実である。そして幻滅の消失は、他方で、イリュージョンの消失とも同義であった。「俗な市民」の生活が、その全容を現わしてくる。だが、イリュージョンと幻滅を経過したのちに全容を現わしてきた俗な市民生活は、もはや単純な市民の生活そのままではあり得ない。それは十分に失望し、十分に自己を蔑視し、十分に世界の退屈さを知っている「俗」である。それはまた、十分に批評的である「俗」なのだ。

（大岡信「戦後詩概観」『蕩児の家系　―日本現代詩の歩み』（思潮社　一九六九・四））

▼北川透は、大岡の「俗」の発見に着目し、「民衆」という言葉から「市民」への移行によって「戦後」の「俗」を獲得する過程を描く。同時に、「俗な市民」は決して終戦直後の意識そのものではなく、仮構された戦後意識であることを指摘する。

「しかし、黒田三郎の民衆観は、「詩人と権力」ではよく知られているように、《俗な市民》という概念をもった。ここでは〈民衆〉ということばに代って、〈市民〉が登場してくるのである。ともかくのっぺりした〈民衆〉像が〈市民〉に限定されることによって、生動しはじめているのは、次の部分に明らかだろう」

「黒田三郎は、自分が生きている生活社会を《give and take の世界》に擬している。このような〈市民〉感覚は、むろん、滅私奉公という形で、国家への一方的献身を要請された、戦前の社会からの解放という契機を抜きにしては訪れようがなかった。言ってみれば、黒田は、戦後という場所に素手で降り立つことによって、そのギブ・アンド・テイクという〈俗〉なる感覚をつかんだのである。」

「しかし、黒田三郎の「詩人と権力」が書かれた一九四八年頃、そのような《俗な市民》を対韓させるような社会的・生活的な基盤があっただろうか。（略）このことは、黒田のギブ・アンド・テイクのバランスのとれた《俗な市民》感覚が、実は、現実の根底を欠いた観念的な市民感覚だったことを示しているだろう」

（北川透「〈荒地〉の文明批評的性格をめぐって」『荒地論　―戦後詩の生成と変容―』（思潮社　一九八三・七））

↓「民衆」から「俗な市民」へのリアリティによって黒田三郎の戦後意識の実質が形成。（ただし、「詩人と権力」が書かれた当時の「市民」ではなく、仮構された「市民」感覚として）

▼このことは、「荒地」理念の解体を、戦後社会の総体安定性にみる吉本論ともつながる。

「荒地」が、戦後社会の相対安定性によって、運動としての役割を終ったといいうる根拠は、いくつか考えられる。

第一次戦後派に共通した傾向であるといいうるが、そのいちじるしい観念性、非日常性、倫理性、表現の論理性、といった「荒地」グループの特質は、社会の表面的な安定性からくる日常的な安定感によって、変化をうけざるを得なくなって来た。表現の面からいえば、日本の日常語格にたいする反逆性は、この安定感によって、幾分かずつ反逆性を薄められざるをえなくなってくる。余程の持続力と強固な内面性をもたないかぎり、いわば、内部世界と現実との接触する地点で、無限に表現の領域を拡大しようとする「荒地」運動の主要なテーマは、存続することが困難になったといいうる。

（吉本隆明「戦後詩人論」『抒情の論理』（未来社　一九六三・四））

○「ダアザイン」としての「俗な市民」

▼「俗な市民」という問題は、単行本版では削除されている「ダアザイン」という言葉を参照すると

わかりやすい。

「しかし、ともかくも、共産党が人間的であるかないかといったことは、やはり俗な市民のひとりとして自分を省みるところからはじめなければならぬ」(p.270)

▽「しかしながら、共産党が人間的であるか、ないかといふ問題は、先ず、ダアザインとしての俗な市民としての自己を省みることからはじめられなければならぬ」『荒地詩集 1951』版

→「俗な市民」という言葉は〈ダアザイン〉としての関わりにおいて発想されている。『荒地詩集 1951』版では、「戦後の世代の胸を蝕んでいる絶望」という文脈において「ダアザインとしての我々が、このやうな疑問を自己の内に持ち」と、戦後世代の内面を言及する際にも「ダアザイン」という言葉がつけられている。河上肇の『自叙伝』は、間違いを犯す人間としての「我々の現実がどういふものであるか、ここにひとつの貴重な資料」として位置づけるられている。世界内存在としての人間から「俗な市民」は発想されているということができる。

○「民衆と詩人」における「民衆」という言葉の発せられ方について

▼黒田は「民衆」という言葉を疑いなく使っているわけでもない。「民衆」という言葉がどのように発せられているかにはかなりの揺れがある。

▽「詩は民衆のものである」(『荒地詩集 1952』)

▽「詩が民衆のものであるならば、作者が無名の私であればあるほど、詩は享受の純粋さを増す」

▽「ここで、論を帰して、詩人が民衆の或る一面を代表する、という仮定について、再び云えば、それは民衆のひとりひとりが、胸深くしまつていて外に出さないものを、民衆に代つて表現することである。民衆には、必ずそのような半面があるからである」(『荒地詩集 1952』)

▽「そして、もし、詩人がそうでなくなれば[民衆の抑圧された暗い一面の代弁者…引用者注]、いつでも、新しく次の言葉がくり返されねばならぬのである。詩は民衆のものである。」

→ここでの「詩は民衆のものである」ということばは「民衆と詩人」冒頭の「詩は民衆のものである」という事実確認的な発言とは異質と言わざるを得ない。ここでは、「詩が民衆のもの」ではなくなる可能性に対して行為遂行的に「詩は民衆のものである。」という言葉が発せられている。事実確認的な発言としての「民衆」と行為遂行的な発言としての「民衆」の混在。

▼モダニズムに対して意味の回復を志向した際、言葉が架橋される回路はどこに設定されうるのかという問題に直面せざるをえない。そのとき、言葉の共同性は何によって支えられるのかという発想において「民衆」という言葉が呼び出される。鮎川は「われわれ」という共同性を基盤に発言することができたが、黒田にはそういう発想が乏しい。→黒田が「国語の醇化」といった発想の根底にある問題がここにあるともいえる。また、黒田の「民衆」という言語の土台となる範囲の設定は、鮎川と黒田の「共同性」をめぐる決定的な差異を生むポイントとなる。

■「共同性」の範囲をめぐって

○「僕たち」という言葉

「第一次と第二次という二つの戦後、――僕たちの戦後感覚は、単に第二次大戦後に根ざすものではない。僕たちの詩人としての精神は、第一次大戦後絶えず分裂と破壊を繰返してきた世界史の、幻滅的な尖端である現代意識に於て成長してきたからである。」（鮎川信夫『現代詩とは何か』）

→鮎川信夫「現代詩とは何か」における「僕たち」は明確に「荒地」に属する人々、同じ時代を共有する者たちを指している。

→「僕たち」と「われわれ」

「「現代は荒地である」ということが、いわば僕たちのあらゆる思想の底辺であるが、〈荒地〉をその言葉の象徴的ムードでしか理解出来ない人達にとって、われわれの仕事が一体何を基準としているのか甚だ不可解であるのかも知れない。いつも寸法の違う物差しで測られることによって、僕たちが感ずる当惑の幾分かは、われわれ自身で巧く説明し得ない困惑を含んでいる。」（鮎川信夫『現代詩とは何か』）

▼ここでの「僕たち」と「われわれ」は交換可能に思われる。「僕たち」「われわれ」は、同じ理念を共にする者しか範囲に入っていない。

○「われわれ」という言葉における鮎川と黒田の差異

→鮎川「現代詩とは何か」は黒田の文章を引いている箇所が多くあるが、その語りは黒田とは異質である。その異質性は、内容の異質性というよりは、鮎川の文章の〈語り口〉によるように思われる。鮎川の語りは共同の経験を持つ者としての「われわれ」という主語により、「われわれ」の置かれた現実を語る。

「戦争という共同体験を持つことによって戦後の荒地に生き残ったわれわれは、われわれ自身の生活と共に、新らしい時代の課題に直面することになったのである。」（鮎川信夫「現代詩とは何か」）

「ここに表れてくる倒れた男は、戦争から生きのこった人間であるとともに、〈荒地〉そのものの象徴である。われわれの経験は肉体とともに滅びた。しかし、われわれにとって未経験の文明の幻影は、十字架上の入りストのように生きている。生きている幻影をとおして、われわれはわれわれの荒地を見出す。しかしわれわれはこの荒廃した地上を掘りかえすのに、われわれの生身の爪しか持っていないのである。」鮎川信夫「現代詩とは何か」）

→一方、検討対象の黒田の文章において、「われわれ」が世代的限定を受けている箇所は少ない。（そもそも「われわれ」の数が少ないということもあるが）さらに言えば、鮎川の〈語り口〉に近いように見える以下の二つの箇所は、単行本版では削除されている。『内部と外部の世界』「あとがき」には、「なおあまりにも生硬、粗雑な部分は表現を改めたり、一部削除したりした」との注意書きがある。しかし、異同の問題は単なる「生硬、粗雑」の改変、削除にとどまるものではなく、過去の〈語り口〉に対する違和感に発しているのではないか。

▽『内部と外部の世界』（昭森社　一九五七）では削除された部分

その結果、我々は、我々が既にそのなかにある者として以外、感ずることも考へることも出来ぬ、ひとつの運命的な位置に於いて、自己を発見せざるをえないのである。単に見物席に坐つてをれない時代の唯中に、我々は自己を見出してゐるのである（「詩人と権力」『荒地詩集 1951』）

無関心にすぎるためには、我々は、自己のみぢめで愚かな生活によつて余りにも自由を縛られ、しかも精神的な存在としては、この束縛のなかから可能性を求めて自己の存在を賭けねばならない。いくつかの閉ざされた門を現代人としての我々は乗り越えてゆかねばならぬのである（「詩人と権力」『荒地詩集 1951』）

■「代行」と「代表」

▼黒田の詩論においては、「遺言執行人」としてしばしば問題化される「代行」の問題は表れず、詩人の立場の問題は、専ら「代表」の問題として語られる。そこにおいて、「俗」という概念を導入したとしても、その思考はある程度広い範囲を持つ概念としての人々の普遍性を基盤にしているといえる。とするならば、死者の言葉を語る不可能性といった、語る資格の問題は少なくとも黒田の詩論においては顕在化しない。

○「代行」の不可能性、「死者」の〈代わりに語る〉ことを拒否しつづける態度において批判的な位置に立つことの指摘。

亡き友Mの遺言執行人としての資格でのみ、この詩人は、彼のためにとっておかれた場所、位置があるなどとは予想したこともなかった戦後日本に、再び入って行くことをかろうじて正当化したのであった。

（中略）

しかしこのことは、詩人が彼自身を遺言執行人だと、つまり死者のために語る代理人だと見做したということを意味しない。言うならば、死はここでは現在の世界のなかでの不在、無の奇妙な現前を意味している。この点では、遺言執行人は使者たちの言葉よりもむしろその沈黙を守ることを決意したのだ、という方がより正確な言い方だろう。彼に割り当てられたのは、死者の遺言が正当に尊重され、そして執行されるかどうかを監視する作業ではなく、そうではなくて彼は現在の世界に対して、死者の遺言がすこしも理解されることはないということを告げることであった。

（酒井直樹「戦後日本における死と詩的言語」『日本思想という問題』（岩波書店　一九九七・三））

■黒田における「自由」の問題

○「権力と詩人」における「羊の自由」

最も兇暴なジャコバン党員が、どんなに熱烈にナポレオン・ボナパルトの支配の下に参じたことか。それがひとつの集団精神として民衆の上にあらわれるとき、自由とは党派に対する献身にほかならない。民衆を引きずっていくものは、驚異的なものであり、伝説的なものであり、そして、権力である。民衆の名において支配するものが、民衆のひとりひとりから自由を集めて、これを

一擲するとき、残されるものは、集団の専制だけである。民衆の名において集団の専制支配が行われる。（「権力と詩人」）

↓「権力」の源泉としての民衆の「自由」

・「道」（『時代の囚人』昭森社　一九六五・十）

いそがしげに過ぎてゆく見知らぬひとびとよ
それぞれがそれぞれの中に違った心をもって
それぞれの行先に消えてゆくなかに
僕は一個の荷物のように置き去られて
僕は僕に与えられた自由を思い出す

右に行くのも左に行くのも今は僕の自由である
戦い敗れた故国に帰り
すべてのものの失われたなかに
いたずらに昔ながらに残っている道に立ち
今さら僕は思う
右に行くのも左に行くのも僕の自由である

↓ここでの「自由」は「一個の荷物のように置き去られて」というようにむしろ〈放置〉に近いものとしてある。「自由」を奪われた青年達が戦争の終わりによって「制服」を失い「自由」となる。彼等は「自由」となると同時にばらばらの存在として放り出される。同時にそれは「ペテン師」「百姓」「銀行員」といった役割に戻っていくということを意味する。「与えられ」た「自由」を持つ一人としての位置から発せられる詩のことば。むしろ、こうした「自由」の使い方において、時代に共通する人々の一人としての「孤独で自由な自分」が見出されているといえないか。

・「我等の仲間」『時代の囚人』（『荒地詩集 1951』に掲載）

孤独と自由を奪われて　兵営や軍需工場や野や山で　階級章とニュウムの食器で育った青年たちは
ぴったり身に合った制服をぬぎ捨てたとき　制服とともに何を失ったのか

愛の孤独と窮乏の自由のなかで　さらに孤独で自由であるために　くたびれた背広を着て巷に出で
ラッシュアワーの電車に足をふまれ　他人の喜怒を自分の喜怒として　ガラス窓のなかで一日働きと
おし　やがて小鳥のように帰ってゆくのが　彼等の新しい運命なのか　火の気のない小さな部屋へ
空腹をかかえて　そこで孤独で自由な自分を見出すために　小鳥のように帰ってゆくのが　それが彼
等の新しい運命であろうか

・「死の中に」『時代の囚人』（『荒地詩集 1951』に掲載）

僕等は故国へ送り返される運命をともにした／引揚船が着いたところで／僕等は／めいめいに切り放
された運命を／帽子のようにかるがると振って別れた／あいつはペテン師／あいつは百姓／あいつは

銀行員

■黒田における「あとがき」の意味

○「権力と詩人」における「7」は、もともと『荒地詩集1951』では「後書」である。

▼もともとは「6」までの分析で完結しているということ。それに付記して、なぜ「詩」を論ずる際に共産党について論じなければならないのかという「フレーム」としての意味づけが『荒地詩集』版においてされている。これを「7」にすることは、最終章を並列に扱うという位置づけの変更をもたらす。→『純粋詩』『詩学』の段階では「7」がない可能性もある。

○『内部と外部の世界』の場合

▼初版単行本版あとがきには「戦後の詩壇にも、徐々にひとつの良識らしいものができかけて来た身のほどを知らない独断的な評論などは、消え去るべき時である。そういう意味では、第二部は前時代の愚かな遺物である。ただ現実の僕のなかには、今でもその愚かな遺物ががんとして生き残っているのだ。それは果せない約束のように、詩を書く僕の心のなかで燃えつづけている」(『内部と外部の世界』昭森社　一九五七・一〇)

▼改版単行本版あとがきには「すでに二十年前の「あとがき」に「身のほどを知らない独断的な評論などは、消え去るべき時である」と僕自身記したが、三十年という歳月は恐しい。三十年前の日本人と現在の日本人では、すっかり変ってしまった。二十年前すでに僕自身は「前時代の愚かな遺物」と記したが、いまでもその愚かな遺物は僕の中にあるようであり、現在の頑迷固陋のあかしとしたくなった」(昭森社　一九七七・七)

→記録としての過去と、現在まで通底している(かもしれない)ものの意識と、それを記すこと

→過去の「記録」として出すといいつつ、本文の改稿を繰り返すこと。

○『失われた墓碑銘』の場合

▼「あとがき」においても転載の際の異同が生じていることの意味

『荒地詩集1952』所収「失はれた墓碑銘について」

「三冊の詩集が三冊とも戦火に焼かれてしまひもはや取り帰す術もない、と思ひ込んでゐたのに、焼け残つた反古紙のなかから、数篇の書き損じが出て来た。恐らく二十歳をすぎた二、三年の間に書かれたにちがひない。もはや、まるで他人のものででもあるかのやうに、僕は此の失はれた墓碑銘の一部分を、いま友によんで聞かしたい気持がしてゐる。失われたものの一部を、思ひがけなくよんで聞かすことが出来ることになつた、というささやかな喜びのために。」

→「もはや、まるで他人のものででもあるかのやうに」という部分が追加。自分の書いたものを他人のものであるかのように友に語るという構造。

『失われた墓碑銘』(昭森社　一九五五)「あとがき」

「無理な点があるにもかまわず無理にまとめたことで、手痛い批評を受けることは、予期しているところである。このような昔の稚拙な詩をあつめて今頃詩集を発表するということについても同様である」

→散逸した原稿、出版の遅延、過去となったテクストを現在に送り出す、という枠組み。遅延して、様々なずれを孕んでいることを「あとがき」に記すこと：「失われた墓碑銘」というタイトル通り、失われたものを遅延して届けるという枠組み。

逆に、「あとがき」において、できあがらない詩について記す『小さなユリと』。本来終わるべき時点を詩集の刊行の後に先延ばしし続けること。各種の雑誌に掲載され、転載され、単行本にまとめられ、その都度「あとがき」が付される→転載をすることと、転載という出来事によって過去のもの、という枠付けをして送り出すこと、しかもその際に「あとがき」についても書き換えが行われること、の繰り返し。

■「生活感情」の問題　～まとめに代えて～

▼三つの黒田の論に通底した意識は確然とした「理論」に対する警戒心と言える。「権力と詩人」は、硬直した「理論」による外部からの支配に対置するものとして、「だらしなさ」を含んだ現実、「俗な市民」によって、教条主義の非現実性を批判し、「詩の難解さについて」は、日本的な文脈を無視したヨーロッパの思潮の素朴な〈移植〉行為によって、言語という「社会的産物」を扱う際の態度の問題性を批判する。「民衆と詩人」において黒田は「詩人」のよって立つ基盤を「民衆」の内面とどう関係するのかという立脚点から考察する。しかし、黒田は「詩」「言語」の基盤となるものをかなり普遍性を持った範囲の中で思考する。その点に黒田と鮎川の決定的な違いがあるといえるだろう。

『荒地詩集1951』目次

現代詩とは何か……鮎川信夫 130
1 詩人の條件
2 幻滅について
3 祖國なき精神
4 なぜ詩を書くか
5 詩と傳統
6 詩への希望
詩人と權力……黒田三郎 199
破滅的要素（スペンダーとオーデン）……加島祥造 224
1 カフカより脱出
2 W・H・オーデンの位置

『荒地詩集1952』目次

Ⅱ エッセイ

詩人の運命……黒田三郎 116
1 詩の難解さについて
2 民衆と詩人
流血……堀田善衛 135
自由主義者の悲劇（スペンダアの『ある判事の裁判』について）……中桐雅夫 140
ニッポン……加島祥造 160
地獄の發見……鮎川信夫 193
Ⅰ ボードレールについて
Ⅱ 地獄の發見（ダンテ・ボードレール・エリオット）

Ⅲ 解説

荒地詩集をいかに讀むか……黒田三郎 216
荒地の新しい詩人　ライト・ヴァース　亡命感覺への共感　形
とボディの問題　格調の高さとは何か　詩と詩でないもの　田村の
詩と論理　片假名と平假名　二種類の言葉　經驗の問題　「荒地」
と宗教　言葉の意味の回復
田村隆一
中桐雅夫
鮎川信夫